

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第118号 令和4年(2022)12月10日

資料見聞

おめでたい大漁旗



(上) 恵比須・大黒・宝船の大漁旗

(左) 一富士二鷹三茄子の大漁旗 2点とも当館蔵



1点は、福の神の恵比須が、やはり福の神の大黒や米俵・珊瑚が乗った宝船を引っ張り、船の上には「祝」「大」「漁」と書かれた小判が舞っています。もう1点は夢に見ると良いとされた「一富士二鷹三茄子」を描いています。これらは大漁旗です。

大漁旗とは、沖の船から陸の人びとへ大漁を知らせるために掲げる旗です。無線機のない時代、船にはためく大漁旗は有効な通信手段でした。新造船の進水にあたって親類縁者から贈られ、贈り主の名前や船名のほか、めでたい図柄が描かれたものもあります。1月から始まる企画展「れきみんコレクションーなんでもランキング」の、めでたいランキングで展示予定です。「一富士二鷹三茄子」はまさに吉夢のベストランキングで今度のテーマにピッタリです。

このランキングはいつからあるのでしょうか？調べてみると、18世紀の『鶉衣うすえ』に「節分の夜の宝舟に一年の幸を待より、一富士二鷹の品定も。これらは和朝のならばしにて」とあるので江戸時代中期には知られていたようです。ただなぜこの三つかという理由はあやふやで、諸説あります。ランキングの根柢など実のところあいまいだ、ということでしょうか。

(梅野・中村)

企画展

れきみんコレクション！

なんでもランキング

会期：令和5年1月2日(月・振休)～3月12日(日)

那須 望

当館は、高知県の歴史や文化、くらしに関わる資料を集め、研究し、その成果を展示しています。開館から30年をむかえ、資料数はなんと15万点を超えました。普段は、考古、歴史、民俗、美術工芸の各分野からアプローチする展覧会が多いのですが、今回は、分野の垣根を取り払い、さらに難しい歴史解説はいったん抜きにして、多彩なコレクションをおとんなから子どもまで気軽に楽しんでいただける企画を目指しています。

そのためのキーワードが「ランキング」なのですが、その前に、当館のコレクションの成り立ちについて、少しお話しします。実は、当館のコレクションのなかには「当館が集めたものではない」資料が含まれています。いったいどういうことでしょうか。

■ふたつの前身

当館が開館する以前、県内には歴史や美術などの資料を収集、展示する県立施設がふたつありました。

ひとつは高知城の懐徳館です。その歴史は古く、明治時代に図書の供覧の場としてスタートし、大正時代にはすでに歴史、美術工芸品を展示していました。昭和初期に県の施設となり、民俗資料と出土品の収集と展示も行うようになりました。

もう一つは高知県立郷土文化会館で、昭和44年(1969)に開館し、県内



旧郷土文化会館、現在の文学館外観と石碑 (画像提供：高知県立文学館)

の歴史、民俗、そして県内外の美術工芸の資料を集め、研究し、展示してまいりました。平成5年(1993)の閉館後、建物はリニューアルされ、現在は県立文学館となっています。

平成3年(1991)の当館の開館にあわせて、懐徳館の収蔵資料と郷土文化会館の美術作品以外の資料(美術作品は平成5年開館の県立美術館へ移管)が当館へ移管されることとなり、ふたつの施設はその役割を終えました。つまり、当館は懐徳館と郷土文化会館のコレクションを引き継ぐ形でスタートしたのです。



亀(タイマイと思われる)の標本 当館蔵

■なぜ歴民に？不思議な資料
懐徳館は大正から昭和までの長きにわたり、本県の博物館的役割を担って

いました。そもそも博物館は美術や歴史の資料だけでなく、動植物や地質などの自然、人々の暮らしにまつわるもの、古今東西の珍しいものなど、まさに「なんでも」集めて見せる場所でした。今年開館五十年を迎えた日本で初めての博物館、東京国立博物館も、明治に開催された博覧会をきっかけに設立されたのです。



センザンコウの標本 当館蔵

この2枚の写真の標本資料は、懐徳館の博物館的品格をよく表しています。いずれも今では取引が禁止されている剥製です。現在、県内には自然史資料を総合的に扱う県立施設はありませんが、懐徳館では自然史資料も展示して

いたようで、ほかにも鉾物などの旧蔵品も移管されています。

本展ではこれらの資料を「なぜ歴民に？不思議な資料ランキング」として紹介し、当館のコレクションを紐解くプロローグとします。

■そのほかのランキング

ここからは、本展で紹介するランキングのなかからいくつかの資料を紹介します。

まずは「まぶしい！キラキラランキング」から甲冑です。

金色の小さな板のような部品（小札）を赤色の糸の緒（威し）でつなぎ、前面と背面の二枚の胴がそろっていることから「金小札紅糸威二枚胴具足」といいます。赤と金の組み合わせだけでもキラキラと豪華なうえに、兜の前立てにはダメ押し金の龍が付いていて、戦場でも目立つこと間違いな

し…ですが、実戦用ではなく、戦いのほとんどなくなった江戸時代に造られたものと考えられています。

次は「わっ！おおい！ランキング」から「大皿鉢」です。

皿鉢は高知県の郷土食である皿鉢料理を盛りつける皿のことで、前菜からメイン、デザートに至るまでを複数人分盛り付けるため、そもそも普通の皿より大きいのですが、この大皿鉢はもっと大きい！直径は約125cmもあります。

高知市にあった料亭の旧蔵品で、料理を盛り付けるのではなく、玄關に飾って調度品として使用されていました。

金小札紅糸威二枚胴具足
明神勲男氏所蔵、当館寄託



大皿鉢 当館蔵

最後は「こんなものまで資料なの？ランキング」です。

この小さな布切れは、武士半平太が切腹する際に身に着けていた襦袢の一部と伝わっています。半平太は土佐勤王党の中心人物でしたが、山内容堂の怒りを買って投獄され、慶応元年（1865）37歳で切腹を命じられました。半平太には妻がおり、入獄中に妻に宛てた手紙が今も残されています。明治時代に入ると半平太の名誉回復が図られ、明治24年（1891）には中岡慎太郎とともに正四位が贈られています。そのため、妻は幾度かの下賜をうけていたようで、「祭資料」や「金参千円」と書かれたのし袋が残っています。

一見すると何の変哲のない布切れと

古めかしいのし袋ですが、志半ばで散った志士の無念さと、残された妻の、夫を思う気持ちが伝わってくるようです。



襦袢切れ



のし袋

■あなたが選ぶランキング

会場では、来館者のみなさんに投票していただき、完成するランキングも準備予定です。ぜひご参加ください！

対談

しゃがみ 写紙の方法論

武吉 孝夫さん
小林 勝利さん

企画展「武吉孝夫写真展 高知県の

山村を歩く」の関連企画として、武吉孝夫さんと小林勝利さんの対談を開催しました。平成19年（2007）から3年間、お二人は高知県の山村を取材し、その間、武吉さんは小林さんに写紙を送り続けました。写紙とは、取材中の見聞や思索を写真に書き添えた葉書のこと、武吉さんの造語です。写紙の解説にはじまり、小林さんが予め選んだ写紙の写真をもとにした写真論、写真集の構成にも話題が及び、興味深い対談となりました。



令和4年10月23日(日) 武吉さん(向かって左)と小林さん

■写紙という方法

武吉 写紙(写真手紙)を発想した原点は絵手紙ですが、写紙もあと10年もしたら全国的なブームになるのじゃないかなと希望を持っています。みなさんで勝手に写紙をやりとりしてもらえたらいいと思います。

インターネットが発達し、今では簡単に撮ったような写真がたくさん出回っていて、ツイッターでは、感覚的な文章がツイートされています。

けれど、それでいいのかと疑問に思い、自分の鍛錬ということもあって「写紙」をはじめました。運転をかってでくれた小林さんへ、3年間毎日のように、写真に文章を添えた写紙を送りました。

書くことは考えることです。写紙を毎日のように書くことで我ながら多少は思索が深まったと思いましたが、自己満足しながら続けました。

写紙によって次の取材の課題も浮かび上がってきました。

■人生を感じる手

武吉 小林さんが選んでくれたのは、

まずは手の写真ですね。私は手を撮るのが好きです。手を見れば、その人の歩んできた人生を感じます。写真集に手の写真を4枚載せました。

この写真は、中追なかおで楮この皮はぎをしていた女性の手です。「あかぎれが痛いろう」と声をかけると、「写してくれてありがとう」と言ってくれた。写紙には「聖女の手だ」と書きました。



中追 (いの町)

小林 手の写真からは、風土や、どうい暮らしをしてきたかがわかりますね。私も手に興味を持っています。

土門拳賞を受賞した写真家の南良和が、60年ほど前に秩父で21歳の嫁さんの手を撮っています。ひび割れがすごくて21歳とは思えない手です。

今回の取材でも、言うに言えないような苦勞話を聞きましたね。

武吉 今はまだとても発表できない深刻な話があったね。顔もたくさん撮っていて、笑顔もあれば、その人の人生を語るような表情もあるけれど、写真上では手だけで語ってもらった方もいます。

米軍の攻撃で中指の先を失った方には、この手を「撮ってくれ」と言われました。誰しも自分の人生を語りたところがある。その方は「運がよかった」と言った。両脇の戦友は即死だったからと。15年前は、戦争体験がまだ生々しく語られた時代でしたね。

■助手席から見る光景

小林 私は仁淀川流域をおもに撮っています。旅はそこからはじまって、他の地域へと拡大していきました。

高知県の山村を記録するという意図を知らなかったの、まだ続けるのかと思いましたが。けれど、人を撮りたいという思いもあって、武吉さんは気楽に声をかけて人を撮りはじめたので、便乗できてよかったですよ。運転していた私が見られなかった風景を武吉さんは助手席で見えて、「ちよつと停めてや」と言って撮っていた。この枯れ木の写真、上手いですね。

武吉 枯れ木が1本伸びているだけで



大野 (いの町)

は、ふつうは写真になりにくい。

写真集には枯れ木の写真を、手と同様に4枚入れました。村が寂れていくさま、村の機能が失われていく姿を、枯れ木を利用して象徴的に盛り込み、表現しようと試みました。

小林 こういう写紙を送ってこられると「やられたね」と思いました。武吉さんはフィルムだが、私はデジカメで撮っているのです、こんな感じに背景がぼけてくれない。同じ場所で写真を撮っても9割は負けていたと思います。武吉さんの写真は、被写界深度がよく考えられて、ピントが適切だ。

武吉 謙遜しているが、小林さんは山村の写真で土門拳文化賞や高知県出版文化賞をとっています。それだけの力がある。けれど自分は、小林さんを偉い人と思わず普通に付き合っています。車で山村を巡ると時間がかかる。その間、写真の考え方が培われお互いに成長できました。得がたい友達です。小林 こちらこそ。「仁淀川の上流へ連れて行ってや」という武吉さんの声

掛けて、良い方向へ行ったと思いい、感謝しています。

■民俗学の視点から

小林 2人の先輩にあたる民俗写真家の田辺寿男さんが、『吾川村史 民俗編』に、加枝に4カ所ある「呼び石」について書いています。

放送設備のない時代にコバシリと呼ばれる役の人が呼び石の上に立って、「明日、税の取り立てがあるぞー」等村の行事を知らせるということを、それで読んでいました。

そこで、写真の方を訪ねたところ、呼び石の上で実演してくれました。

私はそれを見るだけでしたが、武吉



加枝 (仁淀川町)

さんはこうして記録を残しましたね。武吉 とにかく記録しておかないといかんという気持ちでした。あと10年もしたらやる人は居なくなるような行事を中心にたくさん撮りました。全部が民俗学と言えれば民俗学、記録と言えれば記録になっていると思います。

■山村の厳しい状況

武吉 今、山村を巡っても撮れないような写真をたくさん撮りました。当時も高齢化や過疎で厳しい状況でしたが、今や限界を通りすぎて諦めしかなない。それが山村の現状です。

15年前は、車道が通じていない集落がありました。いの町南越で聞いた話ですが、塵肺を患った男性が病院へ通うのに、タクシーが待つところまで30分も歩いていました。男性は待ちわびた車道が開通する1ヶ月前に亡くなったが、工事の人が気を遣って霊柩車を通してくれて嬉しかったと、男性の奥さんが話してくれました。写真集の最後は、その車道の写真にしようと考えました。小林 あれは、夕方の撮影でしたが、日が暮れるほど、天気が悪いほど、良い写真が撮れるというのが彼の持論です。偏屈ですね。写紙には「この写真を撮ったことで山村の取材は70、80%完成した」と書いてありました。武吉 社会に対する痛烈なメッセージ

になると思ったのです。けれど、それではよくある写真集になってしまうと思いい、今回は人生を主体にしたいと考え、その後に葬儀や先祖祀りの写真を加え、写真集に仕上げました。

■受け継がれる暮らし

武吉 若い頃、四万十川の民俗を撮りたいと思って大阪から高知へ帰ってきました。それで四万十川流域の正月や盆等の民俗行事を記録してきました。その一環の精霊流しを写真集の最後にしました。それによって、山村で代々、営々と受け継がれてきた暮らしを象徴的に出したかった。白黒写真は特に象徴性を重視しないと、心が伝わりにくいと思います。(文責 中村淳子)



河内 (四万十町)

南国市野田の神々

梅野 光興

11月9日に南国市の後免野田生涯学習スクールで「南国市の民俗」と題しお話をさせて頂きました。これをきっかけに、野田地区の神々について少し調べてみました。

◆野田について

野田は南国市の中心地・後免に隣接する農村です。上野田、下野田、西野田の3地区に分かれています。何軒も家がぎっしり集まっており、その周りを広い田畑が取り囲んでいます。そして高知龍馬空港から飛び立った飛行機が時折空を横切っていきます。印象的なのは水路です。ゴンゴン水が流れる水路が道や家の横をいくつも流れている風景が目が奪われます。

◆大将軍神社

最初に訪ねたのは上野田の大将軍神社です。神社は水路の向こう側です。この水路は山田から取水さ



上野田を流れる舟入川

れた舟入川で、昔は物部川から物資を乗せた舟が浦戸湾を経由して城下町と往来していました。今

ではちょっと大きな水路といった感じですが、水は勢いよく流れています。

石段を上がると広々とした境内に立派な神社がありました。「大将軍」とは変わった名前前の神社ですが、実は平安時代に流行った陰陽道の神です。正体は星の神で、金星・太白の精とされています。地上に降りて三年ごとに東西南北を移動するため、その方角に行ったり土木工事をするときさまざまな祟りがあると恐れられました。文化12年(1815)に完成した『南路志』には、香長



上野田と西山の氏神・大将軍神社

平野に大将軍が多く祭られていたことが記録されています。「長宗我部地帳」にも出ていますので、中世にあったことは確実です。野田は条里の名残がある所なので、もしかすると古代にまで遡るかも知れません。

◆野々神社

フィールドワークの宿題は「野々神」

を探すことでした。昭和11年刊行の『土佐史談』55号に掲載された「土佐民間年中行事に関する調査」に、長岡郡野田の事例として「野の神様は近郷に名高い神様で、五月十五日の祭礼には、赤飯一斗を炊き酒肴を用意し、参詣に来る人、道を通る人に饗応する」とあります。『南路志』にも野田村の項に「野々神 西野田 祭礼五月十五日 別當瑞松寺(略) 地分牛馬祭場 此処二而野々神祭候由」とあり、野々神は牛馬の神でもあったことがわかります。



舟入川に面し、農業高校横にある野々神社

野々神と似た名前の野神、関連した野津子という神も香長平野には多く、桂井和雄さんの「土佐ノツゴ考」によると、原野を耕作地に開発する時に祭ったのが由来のようです。さて、野田の野々神ですが、職場の住宅地図には出ておらず、どこに祭つてあるのかわかりません。下野田の厳島神社に行ってみました。境内には小さな祠があるくらい。近くの農業高校と舟入川の間に小社が二つ建っていました。社名が書いておらず謎です。もう野々神は無くなってしまったのか

も、と思いましたが。ところが、生涯学習スクールで参加者の方々や公民館長の清水さんに尋ねてみると、舟入川の二つの社のうち南側が探していた野々神だとわかりました(所在地は東崎になるとのこと)。今も農家の方によって祭られているそうで、ほっとしました。

◆荒神

講座では、荒神についても紹介しました。荒神祭、荒神鎮めといって、田畑で勝負無し引き分けの相撲をとり、その場所の土を各家に配るといふ習俗です。久礼田や堀ノ内など南国市内の各地で行われていますが、野田で行っているという情報はありませんでした。こちらにも参加者の方々から、野田でも荒神の祭りに小学生が相撲をやっているとご教示頂きました。おかげさまで荒神相撲の事例がひとつ増えました。これらの情報は、単に現地を歩くだけでは無理で、地元の方に話を聞いて初めてわかることです。出張講座はこのように色々な発見があるので楽しみです。



南国市左右山 宇賀神社の相撲



『土佐のまほろば歩(うおー)く。—いにしえの土佐のまほろば—』

秋のウォークは「古墳めぐり」

絶好のウォーキング日和となった10月27日(木)、「古墳めぐり」の第1弾です。

岡豊山を南側に下り、蒲原山東古墳跡を遠巻きにながめ、芝の前古墳へ。頭を打ちそうになりながら横穴式石室に入るとひんやりした静けさを体感。ここに眠っていた人がいたんだなあと思いを巡らせます。

次に野津古古墳。振り返ると今回のメインはここでした。足を踏み外したら斜面を滑り落ちそうな狭い山道には倒木もあり。今回のコースは倒れた木や竹をくぐったり、またいだりと障害物競走のような様相に。ガイドさんと一緒にないと遭難しそうです。

こんもり盛られた場所によく辿り着くと達成感もひとしおです。古墳の入口は谷側にあるらしいのですが、ここは残念ながら「いやった(ふさがった)」とのことです。

今回の特別講師は県立埋蔵文化財センターの久家さん。奥谷南遺跡周辺では「旧石器時代でまだ土器がなかった。高知県にはチャートという石があって、割ると刃物になる黒曜石の仲間。それを道具に生活していた。」など、要所要所で解説していただきました。

長畝古墳が復元され



た公園の横を通り、最後は小蓮古墳へ。高知の三大古墳のひとつです。先に行った芝の前古墳よりかなり大きい！崩落の危険アリとのことで中に入ることができず、入口から懐中電灯で照らしての見学となりました。

今年度は「特別編」を1月29日(日)に開催。国史跡・岡豊城跡の普段立ち入らない場所を清掃し遺構を蘇らせる企画です(要事前申し込み)。お楽しみに。

●次回のウォーク

令和5年3月16日(木) 8:30~11:30(予定)

「戦国時代に思いを馳せる」

山城の醍醐味、堀切や堅堀・横堀などガイドさんの気分で国史跡・岡豊城跡をタツクリまわる！

参加費：500円 定員：15名程度

申込受付開始：1月5日(木) 9:00~



令和5年度 春企画 準備中！

来年春のNHKの朝ドラが牧野富太郎博士をモデルとした「らんまん」に決定し、県内でも徐々に牧野ブームが巻き起こりつつあります。

当館では、令和5年4月から、牧野博士が生涯をかけて研究した植物に着目し、企画展「花と木の土佐文化(仮)」を開幕すべく準備を進めています。

花取り踊りなどの祭りや踊り、あるいは、死者の弔いや供養など花の作り物や歌は土佐人の文化にも深く浸透しています。また木の民具や花や木がデザインされた道具など、高知県の庶民の生活を彩ってきた花と木の文化を紹介します。

また、コーナー展では、牧野博士が郷土史家の寺石正路に送った年賀状や書籍を展示します。

自然豊かな春の岡豊城跡の散策とあわせて、お楽しみください。



今年もやります！ れきみんのお正月

毎年、多くのお客様にご好評いただいている『れきみんのお正月』。令和5年1月2日(月・振)と3日(火)の2日間9時から17時まで開催いたします。

毎年恒例の新春福引き、国史跡・岡豊城ガイド。ミュージアムトーク、お茶の振る舞いなどを準備してお待ちしております。

今年の新規の催しとしては、2日午後に行われる『超・岡豊城〇×クイズ』そして、3日午後には、琴古流尺八竹童社藤寿会高知支部の方々による『琴・尺八の公演』を予定し、新年早々、お正月らしさ満開の企画を考えております。その他にも、ペットボトルキャップでミニ門松をつくらう、うさぎ見つけた！などの子どもから大人まで明るく楽しめる、1年のスタートにふさわしい催しがたくさんありますので、新年は、ぜひおそろいで当館へおいでください。お待ちしております。



新年のはじまりは れきみんへGO! れきみんのお正月

1月2日(月・振休)・3日(火)

お琴と尺八の公演や初めての方でも楽しめる五色百人一首、簡単なものづくりなど子どもから大人まで楽しめる企画でお待ちしています。岡豊山のガイドツアーもあります。詳細はチラシ・HPをご覧ください。



第17回 岡豊山フォトコンテスト作品展示

開催中～1月22日(日) 15:30まで

「岡豊山の春夏秋冬」をテーマに応募された写真作品を展示しています。来館者のみなさんが選ぶ「みんなのお気に入り賞」の投票も実施中!
※投票は1月18日(水)まで

民家で囲炉裏の火焚き

1月21日(土)、2月18日(土) 9:30～12:00

岡豊山歴史公園に移築した茅葺屋根の山村民家で、定期的にいろりに火を入れます。

年末年始休館のお知らせ

12月27日(火)～1月1日(日)

※上記休館中も「続日本百名城」のスタンプは警備室(当館1階 9:00～17:00)で押印できます。

岡豊風日(おこうふうじつ) 第118号
令和4年(2022)12月10日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888(862)2211
FAX 0888(862)2110

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり

観覧料 (通常展)大人(18才以上) 470円
団体(20名以上) 370円
(企画展)通常展示込み 520円
団体(20名以上) 420円

無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(一名)

印刷・川北印刷株式会社

<https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/>
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 れきみんコレクション! なんでもランキング

1月2日(月・振休)～3月12日(日)

約15万点の収蔵資料のなかから大きいものや長いもの、豪華なものからちょっと不思議なものまで、これまでとは違う切り口で紹介します。「歴史はちょっと苦手…」という方からお子様まで、気軽に楽しんでいただける企画です。



グリコのおまけ(昭和時代)

企画展関連催し

※すべて要観覧券

●ミニ講座とワクワクワーク「龍馬像づくり」

日時: 2月19日(日) 14:00～15:30

参加費: 1,500円 ※先着10名、要予約

型に溶かした合金を流し込んで造ります。

学芸員によるミニ講座つきです。

●担当者によるミュージアムトーク

1月3日(火)・21日(土)、2月4日(土)、3月4日(土)

各回とも14:00～14:30 ※予約不要

コーナー展

えと 干支の玩具 卯

12月16日(金)～
1月29日(日)

山崎茂氏のコレクションを中心に干支の卯にちなんで全国各地のうさぎ玩具を展示します。



土佐風

コーナー展

昔のくらしの道具

1月13日(金)～3月5日(日)

羽釜や炭火アイロンなど電気を使わない衣食住の道具を紹介します。

